

要旨

「るなら」と「たなら」について、従来の研究では、両形式がともに用いられる場合と片方のみ用いられる場合があること、発話時が基準時になる場合とそうでない場合があることが指摘されている。しかし、このような相違が生じる背景については、まだ統一的な説明はなされていない。本発表では、「るなら」と「たなら」の違いは構築される仮想世界が異なるという点にあると捉える。つまり、「るなら」は前件の事態と同時または前件事態の成立が見込まれると認識される時点で話し手の視点が置かれる仮想世界を構築し、「たなら」は前件の事態が成立したと認識される時点で話し手の視点が置かれる仮想世界を構築するものであると捉える。そして、話し手の視点が置かれる時点は前件と後件が「原因—結果」という事態領域の関係を表すか「前提—結論」という認識領域の関係を表すかで異なり、前者の場合は後件事態の成立が予測される時点に置かれるのに対し、後者の場合は前提の成立時に置かれることを主張する。

1. はじめに

本発表は、現代日本語の「なら」が非過去形に接続する場合（以下、「るなら」）と過去形に接続する場合（以下、「たなら」）の使い分けについて、意味論的な観点から分析することを目的とする。

「るなら」と「たなら」については、国立国語研究所（1964）をはじめ多数の研究で論じられており、両形式とも用いられる場合と片方のみ用いられる場合があること、使い分けの基準時が発話時である場合とそうでない場合があることが指摘されている。しかしながら、このような相違が生じる背景についての統一的な説明は見当たらない。

以上の問題点を踏まえ、本発表では、「るなら」と「たなら」で構築される仮想世界が異なることを述べ、前件と後件の関係によって使い分けが異なることを主張する。

2. 先行研究とその問題点

「るなら」と「たなら」の違いについて論じた先行研究に、まず国立国語研究所（1964）が挙げられる。国立国語研究所（1964）は、「るなら」は予定ないし意志を前提にするもの、「たなら」は完了を前提にするものとし、また「たなら」は後件が前件よりも時間的に後の場合に用いられるのに対し、「るなら」は必ずしもそうではないともしている。ところが、前件が後件よりも時間的に後の場合にも「たなら」が用いられることがある。（以下、下線は筆者による。）

- (1) もし太郎が明後日来たなら、明日花子がかかなり熱心に説得したことになるね。（有田 1993 : 46）

一方、ある時点における事態の表し方と関係することに言及したものに砂川（1986）がある。砂川（1986 : 58）は、「るなら」と「たなら」の使い分けは独立文の規則に従うのが普通であるとしつつ、「過去のできごとを仮定するばあい、まえにくる文の述語が過去のその時点でまだ実現していない（が、いずれ実現すること）をあらわすときは、現在形がつかわれる。また、未来のできごとを仮定するばあいでも、まえにくる文の述語が未来のその時点ですでに実現したこととして表すばあいには、過去形がつかわれる」と述べ、ある

時点において当該事態が実現したか否かによって使い分けられるとしている。だが、このことは「るなら」と「たなら」の使い分けが独立文の原則に従う場合と従わない場合があることを意味するものの、その理由については論じられていない。

この点について、既定性と時制節性の観点から論じた研究に有田（2007、2017 など）がある。有田（2017：9）は、前件が成立しているかどうかが発話時点で決定しているという意味的性質を「既定性（setteldness）」と呼び、事象が発話時以後に成立することを決定づけるような何らかの根拠が発話時において成立している場合も既定が見込まれ、既定的であるとしている。また、時制属性については、有田（2007：23）で「基本形とタ形の両方が出現可能で、かつ、基本形が『出来事時＞発話時』という関係に対応し、タ形が『出来事時＜発話時』という関係に対応しているような節」を「完全時制節」、そうでない節を「不完全時制節」と呼んでいる。そして、前件が非既定的な場合は不完全時制節によって表されるのに対し、既定的な場合は完全時制節によって表されるとしている。しかし、前件が既定的である場合でも不完全時制節によって表されることがある。

(2) 五月二日の喪が明けたなら、訪ねてくる誰にでも会おう…。 (益岡 2006：41)

以上のように、従来の研究では「るなら」と「たなら」について重要な指摘がなされているものの、いずれも不十分な点がある。以下では、「るなら」と「たなら」の出現を確認し、話し手の視点と事態の認識、前件と後件の関係という観点から「るなら」と「たなら」を分析していく。

3. 条件文の分類

条件文の分類は、従来の研究で多様な観点から行われている（国立国語研究所 1964、前田 2009、有田 2017 など）。その中で、有田（2017）は Fillmore（1990）の「話し手の認識態度（Epistemic Stance）」と 2 節で上述した既定性を用い、条件文を以下のように 5 種類に分類している。

- (3) 「予測的条件文」：中立的条件文のうち、前件が非既定的、つまり、事象時が発話時よりも時間的に後で、発話の時点で真とも偽とも決められないタイプ
「認識的条件文」：中立的条件文のうち、前件が既定的なタイプ、つまり発話時点で真か偽か定まっている（か、定まっていることが見込まれる）タイプ
「反事実的条件文」：話し手が否定的スタンスで、すなわち前件が事実と反していることを知った上での仮定を述べる条件文
「総称的条件文」：前件と後件が個別的な関係を越えた習慣的・法則的な関係を表す条件文
「事実的条件文」：前件も後件も事実として成立するような関係 (有田 2017：11-15)

そして、「なら」は予測的条件文、認識的条件文、反事実的条件文、総称的条件文で用いられるとしている。

しかし、「なら」は総称的条件文では用いられにくいと考えられる。例えば、(4) (5) では習慣的・法則的な関係を表しているが、「るなら」は不自然であり、「たなら」はその場限りの読みになる。

(4) プリンは {??冷やすなら／#冷やしたなら}、もっと美味しくなります。 (作例)

(5) 水は 100 度に {??なるなら／#なったなら}、沸騰します。 (作例)

また、(2) の「五月二日の喪が明けたなら、訪ねてくる誰にでも会おう…」のように、話し手の認識態度が肯定的で、前件が既定的な場合も「なら」が用いられる。よって、本発表ではこのタイプを「確定的条件文」と呼び、条件文の一つの種類として分類する。

以上を踏まえ、以下では、予測的条件文、反事実的条件文、確定的条件文、認識的条件文で「るなら」と「たなら」がどのように用いられるかを確認する。

4. 条件文のタイプと「るなら」「たなら」

4.1. 予測的条件文

予測的条件文では、「るなら」と「たなら」がともに用いられる場合と、「るなら」のみ用いられる場合がある。(以下、「るなら」と「たなら」は「{/}」で示すが、これは筆者による。)

- (6) 親に頼めとか、お前がそこは立ち入ってくんなよ…分かったよ、五万だな、必ず返すと {約束する
ならよ/約束したならよ}、まあ、一度だけ貸してやってもいいぞ。 (有田 2017 : 11)
- (7) もし太郎が明後日 {来るなら/来たなら}、明日花子がかかなり熱心に説得したことになるね。
(cf. (1))
- (8) 「実夏が幸せに {なるなら/??なったなら} 私はいない方がいい」
(『ほんとうはいないかもしれない彼女へ』)

(6) (7) と (8) では、後件が成立する状況が異なっている。(6) (7) では前件の事態が成立した状況で後件が成立するのに対し、(8) では前件事態の成立が見込まれる状況で後件が成立する。このことから、「たなら」は前件の事態が成立した状況で後件が成立する場合にのみ用いられることがわかる。

4.2. 反事実的条件文

反事実的条件文では「るなら」と「たなら」がともに用いられる場合と、「たなら」のみ用いられる場合がある。

- (9) お金が {あるなら/あつたなら} 買えるのに。 (蓮沼他 2001 : 59)
- (10) (中田が引退してしまったから、次回のオーストラリアとの親善試合は、中田なしで戦わなければ
ならない) 中田が {出場するなら/出場したなら}、前線へのパスがスムーズに通るだろうが、今の
中盤のメンバーだけでは難しいな。 (有田 2007 : 132)
- (11) もっと {??注意をするなら/注意をしたなら}、事故は起こらなかつただろう。 (蓮沼他 2001 : 59)

(9) ~ (11) では、いずれも前件の事態が成立した状況で後件が成立することを表すことができる。しかし、(9) (10) では前件の状態または前件事態の成立/不成立が見込まれる状況で後件が成立することを表すこともできるのに対し、(11) ではそれができない。例えば、(9) では『お金がない』という状態であるため、『買う』という事態が成立できない」という事実に基づき、「お金がある」という状態を仮定し、その状態では「買う」という事態が成立できるということを表すことが可能である。それに対し、(11) では『注意をする』という出来事が成立しなかつたため、『事故が起こる』という事態が成立した」という事実に基づき、

『注意をする』という出来事が成立した状況では、『事故が起こる』という事態が成立しなかった」ということを表しているため、前件の事態が成立した状況で後件が成立するということを表す必要がある。以上から、「るなら」は前件の状態または前件事態の成立／不成立が見込まれる状況で後件が成立する場合に用いられることがわかる。

4.3. 確定的条件文

確定的条件文では「るなら」のみ用いられる場合と、「たなら」のみ用いられる場合がある。

- (12) 五月二日の喪が {??明けるなら／明けたなら}、訪ねてくる誰にでも会おう…。 (cf. (2))
- (13) (落第したことを知っている) どうせ {落第するなら／??落第したなら}、あんなに努力するんじゃないかった。 (蓮沼他 2001 : 61)

(12) では、前件の事態が発話時以降に成立した状況で後件の行為をするということを表している。それに対し、(13) では前件の事態が発話時以前に成立したことを知り、前件の事態が成立すると知っている状況では後件が成立したということを表している。換言すると、(13) では前件事態の成立が見込まれる状況で後件が成立したということを表していると言える。このことから、4.1.と4.2.で確認したように、前件の事態が成立した状況で後件が成立するということを表す場合は「たなら」が用いられ、前件事態の成立が見込まれる状況で後件が成立したということを表す場合は「るなら」が用いられると言える。

4.4. 認識的条件文

認識的条件文では、「るなら」のみ用いられる場合と「たなら」のみ用いられる場合、また「るなら」と「たなら」がともに用いられる場合がある。

- (14) (昨日ガンバ大阪の試合があったけれど、結果はどうだったんだろうか。) もし、ガンバ大阪が {??勝つなら／勝ったなら}、J1 に残留する可能性があるんだが。 (有田 2017 : 12)
- (15) 「でも世の中にお総菜とかお弁当とか色々な食べ物があるんだってことは知ってほしいんです」「文句が {あるなら／??あったなら} 食うな」 (有田 2017 : 19)
- (16) 俺と一緒にヨーロッパに行かないか? ピアノを {続けるなら／??続けたなら} ウチの学校より、お前には向こうのほうが合ってると思う。 (有田 2017 : 18)
- (17) 「実はあのあとすぐに財布が見つかったの」「なーんだ。そんなに簡単に {見つかるなら／見つかったなら}、あちこち探すんじゃないかった。家の中がひどい状態になったのよ」 (蓮沼他 2001 : 62)

(14) では前件の事態が成立した状況で後件の結論が成立することを表しているのに対し、(15) では前件の状態で後件の結論が成立することを、(16) では前件事態の成立が見込まれる状況で後件の結論が成立することを表している。つまり、認識的条件文でも前件の事態が成立した状況で後件が成立することを表す場合は「たなら」が用いられ、前件の状態または前件事態の成立が見込まれる状況で後件が成立することを表す場合は「るなら」が用いられると言える。

一方(17)では、聞き手から受けた情報(前件の事態)に基づき、前件事態の成立以前の行為に対する後悔・残念さを表しており、前件の事態が成立した状況で後件の結論が成立するという意味だけでなく、(13)

の「(落第したことを知っている) どうせ {落第するなら／??落第したなら}、あんなに努力するんじゃないかった」と同様、前件の事態が成立することを知っている状況では後件の事態が成立したという意味も表すことができる。つまり、前件の事態が成立した状況と成立が見込まれる状況の両状況を表すことができるため、「るなら」と「たなら」がともに用いられると言える。

以上から、同一の条件文タイプでも表す内容によって「るなら」と「たなら」の出現が異なるが、いずれにおいても「るなら」は前件の事態が成立した状況で後件が成立する場合だけでなく、前件事態の状態、前件事態の成立が見込まれる状況で後件が成立する場合にも用いられるのに対し、「たなら」は前件の事態が成立した状況で後件が成立する場合のみに用いられる点で共通していることがわかる。

5. 「るなら」「たなら」と仮想世界の構築

「るなら」と「たなら」はそれぞれ非過去形と過去形に「なら」が接続したものであり、3節と4節で確認した「るなら」と「たなら」の使用は、従属節における非過去形と過去形の意味機能と「なら」の意味機能とが関連すると考えられる。

まず、従属節における非過去形と過去形については多角的な観点から論じられているが(寺村 1984、工藤 1995、岩崎 2001、日本語記述文法研究会編 2007 など)、樋口 (2001)、潘・小澤 (2006)、井元 (2016)などは話し手の視点(話し手のイマ・ココの〈見え〉)と事態の認識という観点から非過去形と過去形を捉え、話し手の視点を事態と同時にまたは事態の成立が見込まれると認識される時点に置く場合は非過去形、事態が成立したと認識される時点に置く場合は過去形が用いられるとしている。この捉え方は、4節で確認した「るなら」と「たなら」の出現の違いについても説明を可能にすると考えられる。前件事態の状態、前件事態の成立が見込まれる状況を表す場合には「るなら」が用いられ、「たなら」は前件の事態が成立した状況を表す場合にのみ用いられたが、前者は前件の事態と同時にまたは事態の成立が見込まれると認識される時点に、後者は前件の事態が成立したと認識される時点に話し手の視点が置かれるためと言える。また、「るなら」は前件の事態が成立した状況で後件が成立するということを表す場合にも用いられたが、この場合も話し手の視点は前件事態の成立が見込まれる時点に置かれ、成立が見込まれる前件の事態によって後件の事態が予測されることを表していると言える。

次に、「なら」の意味機能については、従来の研究で、前件の事態が真であると仮定し、後件で話し手の判断・態度を表すものと捉えられている(蓮沼 1985、益岡 1993 など)。つまり、「なら」は話し手が現実と認識している世界とは異なる仮想世界を構築するものと言える。3節で「なら」は総称的条件文と事実的条件文で用いられなかったが、前者は現実の一般的・反復的知識を、後者は現実の経験を表すものであり、仮想世界を構築するものではないためと言える。

以上から、「るなら」は前件の事態と同時にまたは前件事態の成立が見込まれると認識される時点に話し手の視点が置かれる仮想世界を構築するものであり、「たなら」は前件の事態が成立したと認識される時点に話し手の視点が置かれる仮想世界を構築するものと捉えることができる。

なお、確定的条件文で(12)の「五月二日の喪が {??明けるなら／明けたなら}、訪ねてくる誰にでも会おう...」と(13)の「(落第したことを知っている) どうせ {落第するなら／??落第したなら}、あんなに努力するんじゃないかった」でそれぞれ「るなら」と「たなら」が不自然であったが、これは「るなら」「たなら」によって構築される仮想世界と現実世界が一致することになるためである。例えば、(12)で「五月二日の喪が明ける」という事態は現実で成立が見込まれているが、「るなら」が用いられると「五月二日の喪が明ける」という事態の成立が見込まれる仮想世界を構築することになる。つまり、現実の事実を仮想的に捉えようと

するため、不自然になると言える。

6. 前件と後件の関係と「るなら」「たなら」の使い分け

5節では、「るなら」と「たなら」で構築する仮想世界が異なること、また、それには話し手の視点が変わるということを述べた。だが、話し手の視点を自由に移動させることができるわけではない。

- (18) 親に頼めとか、お前がそこは立ち入ってくんなよ…分かったよ、五万だな、必ず返すと {約束する
ならよ／約束したならよ}、まあ、一度だけ貸してやってもいいぞ。 (= (6))
- (19) 俺と一緒にヨーロッパに行かないか？ピアノを {続けるなら／??続けたなら} ウチの学校より、お前には向こうのほうが合ってると思う。 (= (16))

(18) は予測的条件文、(19) は認識的条件文である。どちらも発話時以降の事態を表しているが、(18) では「るなら」と「たなら」がともに用いられるのに対し、(19) では「るなら」のみ用いられる。(18) と (19) を比べると、前件と後件の関係が異なっていることがわかる。(18) では「約束する」という事態の成立が「一度だけ貸す」という事態の成立を可能にする。それに対し、(19) ではそのような関係は考えにくく、「ピアノを続ける」という事態が「ウチの学校より、お前には向こうのほうが合ってる」という結論の成立を可能にする。つまり、(18) では「原因—結果」という事態領域の関係を表しているのに対し、(19) では「前提—結論」という認識領域の関係を表していると言える (Sweetser 1990、網浜 1990、ヤコブセン 1990、Dancygier and Sweetser 2005 など)。

事態領域の関係を表す場合と認識領域の関係を表す場合で相違が生じる理由は、両場合で視点が置かれる時点が異なるためである。事態領域の関係を表す場合は、前件事態の成立から後件事態の成立を予測するため、後件事態の成立が予測できる前件事態の成立が見込まれる時点と前件の事態が成立した時点の両方に話し手の視点を置くことができる。それに対し、認識領域の関係を表す場合は、前件の事態を前提に結論を導き出すため、前提の成立時に話し手の視点が置かれる。例えば、(19) で前件の事態は「ピアノを続ける」であるが、話し手が前提としている内容は「発話時現在の時点で、発話時以降もピアノを続けるつもりである」であり、前提の成立時は発話時である。つまり、「ピアノを続ける」という事態は前提の成立時である発話時現在、または発話時以降の事態であるため、「るなら」のみ用いられると言える。ただし、認識領域の関係を表すからといって常に発話時に視点が置かれるわけではない。(1) の「もし太郎が明後日来たなら、明日花子がかかなり熱心に説得したことになるね」では、前件の事態を前提に後件の結論が成立することを表しているが、「太郎が明後日来る」という事態は発話時以降の事態であるにもかかわらず、「たなら」が用いられている。この文で後件の結論が成立するのは、前件の事態が成立した場合に限る。「太郎が明後日来る」という事態が成立しなかった場合は「明日花子がかかなり熱心に説得したことになる」という結論も成立しない。つまり、前件の事態が成立した時点が前提の成立時になるため、この文で「たなら」が用いられると言える。

7. おわりに

本発表では、「るなら」と「たなら」の使い分けについて分析した。そして、「るなら」と「たなら」では話し手の視点と事態認識の違いによって異なる仮想世界を構築すること、また、前件と後件が事態領域の関係を表すか認識領域の関係を表すかによって話し手の視点が置かれる時点に相違があり、「るなら」と「たなら」の使用に相違が生じることを主張した。Dancygier and Sweetser (2005) では、英語の条件文で事態領域の関係

を表す場合はテンスが「backshifting」するのに対し、認識領域の関係を表す場合はしないとしている。このことは、事態領域の関係か認識領域の関係かという区別が他の言語、他の現象を説明する際にも有効である可能性を示唆すると考えられる。この点についてはさらなる分析が必要であり、今後の課題としたい。

参考文献

- 網浜信乃 (1990) 「条件節と理由節—ナラとカラの対比を中心に—」『待兼山論叢. 日本学篇』24, 19-38, 大阪大学大学院文学研究科.
- 有田節子 (1993) 「日本語の条件文と知識」, 益岡隆志 (編) 『日本語の条件表現』, 41-71, 東京: くろしお出版.
- 有田節子 (2007) 『日本語条件文と時制節性』 東京: くろしお出版.
- 有田節子 (2017) 「日本語の条件文分類と認知的条件文の位置づけ」 有田節子 (編) 『日本語条件文の諸相 地理的変異と歴史的変遷』 東京: くろしお出版.
- 井元秀剛 (2021) 「日本語従属節のテンス構造」『言語文化共同研究プロジェクト』2020, 1-10, 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 岩崎卓 (2001) 「複文における時制」『月刊言語』30 (13), 50-55, 大修館書店.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 東京: ひつじ書房.
- 国立国語研究所 (1964) 『現代雑誌九十種の用語用字 第3分冊: 分析』 東京: 秀英出版.
- 砂川有里子 (1986) 『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ2 する・した・している』 東京: くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第II巻』 東京: くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法3 アスペクト・テンス・否定』 東京: くろしお出版.
- 蓮沼昭子 (1985) 「「ナラ」と「トスレバ」」『日本語教育』56, 65-78, 日本語教育学会.
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法セルフマスターシリーズ7 条件表現』 東京: くろしお出版.
- 潘鈞・小澤伊久美 (2006) 「時間認識は言葉にどう表れるか」『言語』35 (5), 44-51, 大修館書店.
- 樋口万里子 (2001) 「日本語の時制表現と事態認知視点」『九州工業大学情報工学部紀要. 人間科学編』14, 53-81, 九州工業大学.
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文』 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (1993) 「日本語の条件表現について」 益岡隆志 (編) 『日本語の条件表現』1-20, 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (2006) 「日本語における条件形式の分化一文の意味的階層構造の観点から—」, 益岡隆志 (編) 『条件表現の対照』31-46, 東京: くろしお出版.
- ヤコブセン W. M. (1990) 「条件文における「関連性」について」『日本語学』9 (4), 93-108, 東京: 明治書院.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser (2005) *Mental Spaces in Grammar: Conditional Constructions*. New York: Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles J. (1990) Epistemic Stance and Grammatical Form in English Conditional Sentences. *CLS* 26, 137-162.
- Sweetser, Eve (1990) *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.